

常に新たに

オランダ便り

二〇〇八年四月よりオランダのアムステルダム自由大学において一年間の予定で研修しています。しばらくこの大学の様子や雑感などを交えて皆様にご報告、またご挨拶申し上げます。

アムステルダム自由大学です。に学んだ日本人や現在滞在中または関わりのある日本人は少なくありません。この大学は外国人を積極的に受け入れようとする、国際色の強い大学です。日本人で現在研究中の神学関係の同僚としては、田上雅徳氏ともう一人の研究者が滞在しています。

近くに日本人教会もあり、お互いに何かと協力し合う体制ができています。もともとオランダは江戸時代においても日本と通商が続いた国であり、明治期にはアメリカ経由のオランダ人たちが横浜を中心に、広範な宣教活動を展開しました。現在アムステルダムの南には日本企業とその関係者が大勢暮らしています。

アムステルダム自由大学はかの政治家・神学者アブラハム・カイパーが、国家の干渉からも教会からも「自由な」大学を作るという理念のもとに一八八一年に発足した私立大学であり、初年度は学生五名、教員五名という構成でした。しかし、

ニュース・
レター
第4号
アジア・
カルヴァン
学会
日本支部
2008/7/14

その成長は著しく、現在は学生二万九千人、教職員四千人、十三学部を擁する大きな大学になっていきます。大学

のアカデミックレベルはヨーロッパの中でも高く（ある統計では十五位）、卒業生には現首相、副首相、大勢の人々が様々な分野で活躍しています。二〇〇六年度にここで博士号を受領した人の数は二百四十六人です（日本では考えられませんね）。オランダには認可された大学の数は十四あり、現在は国立、私立の区別なく同じ条件で交付金が支給されています。その中でアムステルダム自由大学は国家から補助金を受けながらも独自の建学理念を保持しようと努めています。ちなみにその数字を見れば、総収入の六百七十三億円のうち、七割を国家の補助で、三割を授業料と寄付金などで補っています。その結果、学生の授業料も低く抑えることができるというわけです。

ところで神学部についてですが、なんと我らのグイム・ヤンセ教授が（ん？馴れ馴れしくて済みません）、昨年暮れにライデン大学からこちらに招聘され、この春より神学部長に就任されています。そんなわけで、私は個人的には長い付き合いもあって、今回何かと相談に乗ってもらっています。

神学部には現在三百五十人ほどの学生がいます。ここが判断の難しいところではありますが、志願者減のためなのか、それとも現代世界の情勢に合わせるためなのか、他宗教の学生たちも受け入れつつあり、イスラム教徒はかなりいて、ユダヤ教徒も、そして今後はヒンズー教徒も受け入れる予定だそうです。仏教、神道の学生たちが学ぶ日も

近い将来訪れることでしょう。

良い意味では世界的な視野で神学部を形成していくという方針を持っていますが、キリスト教神学の教員はクリスチアンであっても、その他の宗教の専門家は非キリスト教徒です。大学全体から言えばキリスト教の教員は減少傾向にあります。国全体としてもキリスト教徒の減少はかなり大きく、カトリックは三％、プロテスタントは一％という数字になっています。

こちらでのふだんの生活は、アムステルダムという日本では例えば北海道よりさらに北に位置する緯度にありますから、冬が暗く長い分だけ、夏の明るさ、心地よさを感じており、光と闇のコントラストの強い地域だと思えます。そんな自然環境の中で神学と執筆の時を過ごしています。

（野村 信）



< 4月、ヤンセ氏の研究室で >

第五回講演会

二〇〇八年三月一〇日(月)、立教大学においてアジア・カルヴァン学会第五回講演会(シンポジウム)が行われました。

主題は「ルターとカルヴァンの聖書解釈 詩篇註解をめぐって」で、ルターに関しては発題金子晴勇氏、コメンテーター竹原創一氏。カルヴァンに関しては発題野村 信氏、コメンテーター加藤武氏。司会は竹下和亮氏。まことに充実した時間でした。出席者は四十六名でした。

第一講演

ルターにおける神と人間との認識

『詩篇五二の読解』(一五三二)をめぐって

金子晴勇



ルターは、三回にわたって詩篇五二の講解を試みている。そのうち最初の講解は青年時代のものであるため思想的成熟に欠け、二回目は「七つの悔い改めの詩篇」のひとつとして簡単に扱われたのみであった。ただ、二回目の講解が出版された一五一七年には贖宥証書問題に関連して「九五箇条の堤題」が出されており、そこですでにルターは「悔い改め」を中世的サクラメントとしてではなく、「全面的方向転換」をなすものとして理解している。そして三回目の講解こそ、自身の経験の蓄積に加え、悔い改めと義認の関連を説いているという意味で、完成期の円熟した作品といえるであろう。

本報告では、悔い改めの前提となる罪の認識、あるいは自己認識がどのように神の認識と関係しているのかを問題にする。それは神学における人間独自の自己認識、すなわち神学における人間学の意義とかわっているはずである。

(一) 神学における人間学の意義

ルターが「神と人との関係は、ただ義とする神と罪人としての人間にのみ関係する」といっていることからわかるように、ルター神学の基盤は、こうした神学的な人間認識と神認識との関連にある。だがルターにとって自己認識とは単なる思弁的・客観的な知ではない。それは、罪の認識がそのまま罪の感得であり、経験であって、罪を犯した人は良心によって圧倒されて不安になる、そのような人間のあり方の全体が問われるような知であった。ただ、この感情は、義認論の前提ではあっても、それによって救済が実現するというわけではない。ルターはあくまでも「神が授け、人が受ける」授受の関係を強調していたのである。

(二) 神と人との関係

「両立できない二者の結合」=「逆対応の関係」ルターが良心の深みで経験した内実は神の尊厳と人間の罪深さ、神の怒りと憐れみという人間の理性では捉え難い「両立できない二者の結合」であった。そうした経験が、詩篇における神と罪人ダビデとの関係をとおして語られていく。「律法によつては教えられないし、理性も、聖霊の助けがないと、考えることも理解することもできない」神と人とのこうした逆対応の関係こそ、ルターの霊性思想の特質だといえるだろう。その点ルターの考えはジェルソンの想定した「対応」関係とは異なっている。

(三) 原罪の理解について

詩篇講解では、ルターはダビデが犯したウリヤの殺害とその妻との姦淫罪について歴史的考察はなにもおこなっていない。それは彼が、個別的な実行罪ではなく人間の本性に巢食う原罪だけを問題としているからである。こうした本性の「傷」が、神に対する恐れと愛を生むのである。

(四) 霊性における新生は「聴聞の喜び」にある

ルターによるとこの詩篇は律法によるきよめとは本質的に異なる聖化の道を示している。つまり「御言葉が聞かれ受け取られる」ことこそ「良心が癒される唯一真実で確かな方法」なのである。これによって御霊が人間の心に宿り、御霊の創造的働きによって新生すると善へと導かれる。なおここでルターは人間の心を霊性として語っているのだが、こうした問題については、ドイツ神秘主義との関連やカルヴァンの「心の奥底」との関係などといった観点からも考察されうるであろう。

(要約) 竹下和亮

第二講演

『詩編註解』におけるカルヴァンの人間論

詩編第五一篇をめくって

野村 信

今回の発表の主題は、カルヴァンの『詩編註解』の第五一篇について検討することによって、カルヴァンの人間論について考察することであった。カルヴァンの人間論は、カルヴァンの聖書解釈の方法と深く関わるので、まずカルヴァンが聖書をどのように解釈したかという点から話を始めた。

その際押さえておくべきことは次のことである。カルヴァンの神学活動は、二つに大別することができる。その第一は『キリスト教綱要』で神学の総体を語る努力を続けた点であり、第二は「聖書講義」「説教」「註解書の執筆」という聖書の解釈においては聖書の語句を逐一著者の意図に沿って簡潔・明晰に説き明かす方法をとった点である。

この二つの活動はいわば登山の愛好者が山登りをするのに似ている。登山の前にとのような山か、道順・危険箇所・天候具合・宿泊所といった全体像を「ガイドブック」で把握する。そして実際山に入ると、一本一本の樹木、草花、湧き水、谷岩などを観察しながら歩みを進め、「観察ノート」に植物の生態や生息する昆虫、水の音、湿った空気や香りなどを感動しながら記録していく。

カルヴァンの日常生活は常時、聖書講義と説教を行い、註解書を出版するという作業であったが、他方で神学的に大切な部分は『キリスト教綱要』

に追加するという作業をした。このカルヴァンにとって『綱要』はいわばこの山の「ガイドブック」の役割を果たすものである。他方『聖書註解』は山の一つ一つの構成要素を丹念に記述していった「観察ノート」のようなものである。

カルヴァンは聖書解釈に関してこのような手法を一貫して採ったので、いわゆる「カルヴァンの人間論」というものを議論すること自体に無理がある。むしろカルヴァンの口を通して表

された「聖書著者たちの人間論」が展開されたと言うべきであり、詩編第五一篇が「ダビデの歌」となっていることから、この詩編第五一篇の註解では「ダビデの人間論」が展開されていると理解されるのである。

続いて、詩編第五一篇が「著者の意図を尋ね、簡潔・明晰に説き明かされる」その手法について語った。その際にカルヴァンがいかにヘブライ語の聖書から著者の意図を他に優るものとして解釈しているかを検証し、特に具体的な解釈として三つの用法があると理解した。第一は著者の意図を推測する方法である。第二は聖書の他の箇所を参照する方法である。そして第三は著者の声および



意図をカルヴァンが代弁ないしはパラフレーズする方法である。

結論としては、詩編第五一篇の「ダビデの歌」から明らかにされた人間論においては「ダビデ」という人間を通してみた人間理解」があるということであり以下の点を指摘した。一、人間の愚かさ。二、罪を自覚し、悔い、謙虚に従うことの大切さ。三、人間が許すことには限界があること。四、神の慈しみは豊かであること。五、人は原罪としての罪をもっていること。六、可視的な罪だけではなく不可視的な（心の）罪を認識すること。七、「ヒソブ」という言葉からキリストの犠牲を想起すること。八、聖霊の働きかけとその退去というテーマ。九、人間のうちにある善とは、すなわち上からの賜物であること。十、信仰の種子という理解。十一、回復され、新しく生きること。十二、人間が神に差し出せるものは「砕けたる魂」であること。十三、全教会への祈りへと向かうこと、であった。

以上、信仰者ダビデの姿を通してカルヴァンが理解する人間論を概括した。このような理解がいずれ『キリスト教綱要』の人間論を構築する太い骨組みとなっていたことは頷ける。

質疑応答

両講演者とコメンテーターの発表に引き続き、活発な議論が交わされた。以下、質疑応答の様子についてお伝えしたい。

まず会場から、カルヴァンの『キリスト教綱要』と『詩編註解』との関係について、またテクスト

解釈上の方法論一般について、批判的な質問が寄せられた。これについては、野村氏など講演者・コメンテーターから、それぞれ長年の専門研究に基づいた回答がなされた。

次に「ルターにおいても西田哲学のような『神の自己否定』という逆対応の論理は見出せるか」という、西田哲学を専門とする研究者からの質問が飛んだ。これに対して金子氏から「ルターの思想において中心となるのは、あくまで人間の自己否定と神の恩恵という意味での逆対応である」という回答がなされた。

その後も詩編解釈と罪の問題についての質問や、講演者のテキスト解釈論をめぐる辛口の意見も出て、コメンテーターの加藤氏・竹原氏を巻き込んだ議論は大いに盛り上がった。

特に、西田哲学とルター、カルヴァンの関係を巡って活発な議論がなされたことは、今回のシンポジウムの最大の成果であったように思う。これは、主催者としては全く予想出来なかったことであつた。多くの聴衆が参加するシンポジウムの醍醐味はこのような予測不可能性にあるのではないかと感じた次第である。

(鈴木昇司)

アジア・カルヴァン学会
日本支部運営委員会
<http://society.protestant.jp/>

代表	野村 信
総主事	田上 雅徳
書記	関口 康
副書記	鈴木 昇司
委員	弓矢 健児
委員	斉藤 美万子
委員	山澤 直晃
委員	竹下 和亮
顧問	久米 あつみ

アジア・カルヴァン学会

日本支部からのお知らせ

(一) カルヴァン翻訳会

翻訳会は忠実に続けています。集まる人数は三、四人と少し淋しいですが、他の研究会(リクルール読書会)に合わせて朝の九時という時間から始めたりし、メール参加も含めて楽しく勉強を進めています。

(二) 研究会活動

「第一八回日本カルヴァン研究会」(二〇〇八年六月二三日(月)、青山学院大学)において、午前久米あつみ、穴戸基男、午後永井恵一、関口康と、計四人が発表し、アジア・カルヴァン学会がカルヴァン研究会かと来会者が迷うほどでした。会終了後、アジア・カルヴァン学会運営委員会を開く予定にしましたが、次回カルヴァン研究会のこともあるからと両会の合同委員会を同大学宗教センターで行ったところ、来年二〇〇九年はカルヴァン生誕五百年だから合同の記念の催しを行おうではないかと、話がどんどん盛り上がっていききました。結論として「カルヴァン生誕五百年記念集会実行委員会」が結成されることになり、第一回会合を七月一四日午後、立教大学において開く運びとなりました。楽しみでもあり恐ろしくもあり、といったところですよ。

(三) 今後の予定

(一) アジア・カルヴァン学会第六回講演会
二年間のオランダ滞在を終えて帰朝される田上雅徳氏を迎えて二〇〇八年一〇月に講演会を開く予定です。詳しい日程、場所、演題など決定次第お知らせします。

(二) 二〇〇九年カルヴァン生誕五百年記念行事
出版活動

アジア・カルヴァン学会編『論文集』の発行を予定しています。さらにカルヴァンの著作の翻訳が何種類か出版される予定です。そのうち、久米あつみ訳『カルヴァン論争文書』(仮題、教文館)は三月までに出版されるはずなので、三月に記念講演会が教文館主催で行われる予定です。

記念の催し

(一) エルシー・マツキー氏を迎えての講演会
東京講演は二〇〇九年六月六日(土)の予定。
教文館、新教出版社、日本基督教団出版局の合同主催。アジア・カルヴァン学会と日本カルヴァン研究会は協賛として名をつらねる予定です。

(二) 記念集会

カルヴァン生誕の七月に、アジア・カルヴァン学会と日本カルヴァン研究会の合同主催で行なう予定です。講演ないしシンポジウムには三月末に帰朝される野村代表が加わることになりましょう。

(久米あつみ)

会計よりお願い

振替用紙を同封させていただきました。会費の納入、献金などにお用いくださいますようお願いいたします。該当しない方はご放念ください。